

「もくじゅ」を廃炉に

2011年11月2日、曹洞宗大本山永平寺が呼びかけて原発の是非を考えるシンポジウム「いのちを慈しむ～原発を選ばないという生き方」が永平寺の四季の森文化館にて開催された。東京電力福島第一原発事故から半年、「原発と人類は共存できない」という宗教界からのメッセージを発信する画期的な出来事となった。シンポジウムの前に西田正法事務局長は、かつて敦賀に高速増殖炉建設する際に動燃(動力炉・核燃料開発事業団、現日本原子力研究開発機構)の責任者が永平寺の管主に名前を『文殊菩薩』から命名することに了解を得たとして『もんじゅ』となった由来について言及し「菩薩の智恵を借りて無事故を願ったのなら、浅はかな考えだった。仏教者として世間に懺悔しなければならぬ」と語った。知恵を象徴する菩薩で「三人寄れば文殊の知恵」ということわざでも有名な「文殊菩薩」だが、高速増殖炉「もんじゅ」は、どうだったのか？

高速増殖炉とは？ 運転しながら燃えないウランを燃えるプルトニウムに効率よく変える原子炉(文部科学省)「もんじゅ」は原型炉、国の原子力開発で「実験炉」(常陽＝発電しない、実験のみ)→「原型炉」(もんじゅ)→実証炉(原型炉での成功を受けて2050年をめどに設置を予定する)の順番。しかし実証炉は、「もんじゅ」と構造が大きく違うため「もんじゅ」のデータが生かされない。燃料はプルトニウム。核兵器の材料でもある。28万KWの「もんじゅ」は約1、4トン使用。この量は長崎に落とされた原爆の200発分に相当する。

歴史的に見てみると1983年5月・・・原子炉設置許可、1985年9月・・・設置許可無効確認訴訟提訴、1994年4月・・・初臨界となったが1995年12月8日・・・出力40%で試運転中、原子炉の熱を蒸気発生器に伝える二次系冷却系で配管内に差し込まれた温度計のさや管が設計ミスから折れ、配管内を流れる約480度の冷却剤ナトリウム約0.64トンが漏れて火災事故を起こし、原子炉を手動停止となった。裁判としては、2000年3月福井地裁判決、住民側敗訴(民事も)2003年1月、名古屋高裁にて原子炉設置無効判決。しかし2005年5月、最高裁で控訴棄却となった。

「もんじゅ」にはさまざまな問題がある。第1にもんじゅの直下に活断層が2本走っている・・・1995年、資源エネルギー庁は地元住民の説明会で活断層の上に作らないと明言したが、直下850mには白木・丹生断層とC断層が、存在する。第2に事故後配管内面を調査しないため安全性が調査できない。配管切り口からカメラで挿入できる範囲しか調査しない。配管の腐食の具合が判断できない。第3に必要性・現実性もなく税金の無駄づかい繰り返している。もんじゅの建設と維持管理に約1兆円投入。停止中でも維持管理に年間200億円、1日あたり5500万円の浪費。第4に世界の流れは高速増殖炉からの撤退している。アメリカ、ドイツ、イギリス、旧ソ連、フランスなどが次々と撤退または撤退を表明。現在ロシアと中国とインドが現在推進だが、ロシアと中国は濃縮ウランを使用する高速炉、インドの高速増殖炉は国際原子力機関(IAEA)の核査察の対象外で軍事施設と認識されている。第5に技術的な最大の問題として、冷却材に用いられる液体ナトリウムの管理が非常に難しい。液体ナトリウムは空気中で火災を生じる可能性がある。

その後2005年に改良工事が福井県に認可され、多数の県民の声を無視して国と県は運転再

開を承認し 2010 年 5 月に運転を再開したものの、8 月 26 日の炉内中継装置落下事故により運転停止。修理し操業再開を目指していたが度重なる点検もれが発覚し 2013 年に原子力規制委員会が無期限の使用停止を命じた。さらに 2015 年、安全管理に問題があるとして「運営主体の変更」を監督官庁の文部科学省に突き付けたが返事が返って来ていない。新聞では「もんじゅ廃炉も含めて検討」と報道されている。しかし政府・安倍政権が「核燃料サイクル」(原発で一度使用したウラン燃料を再処理してもう一度原発の燃料としてリサイクルすること)から撤退を表明しないかぎり楽観は許されない。

以上